

2024年12月29日

聖家族の主日

菊地 功 枢機卿 メッセージ

皆様、主の降誕おめでとうございます。

クリスマスにつきものの馬小屋の飾りでは、誕生した幼子が飼い葉桶に寝かされ父ヨセフと母マリアの愛のまなざしによって生まれ守られているさまが描かれています。受肉した神のみ言葉は、家族のうちに誕生し、家族によって守られ、育まれました。降誕祭直後の主日は、このいのちを育んだ家族を黙想し、家族への祝福を祈る日であります。

聖家族は、驚くべき神の言葉に従順に従い、その御旨の実現のために人生を捧げられたヨセフとマリアという偉大な二人と、その結果として誕生した神のみことばの受肉によって成り立っています。すなわち、神による祝福は、神のみ旨への従順によってのみもたらされることが示されています。

ルカ福音は、イエスが十二歳になったときの聖家族の旅路を記しています。過越祭のためにエルサレムに上ったとき、その帰路、少年イエスがエルサレムに残り、家族と離れてしまったときの逸話です。

三日目に見出されたイエスは、自らが神の子であることを明示され、真の家族は神のもとにあることを示されますが、同時にイエスは、神の掟を守る二人から離れることなく、そのもとにとどまるために、両親と一緒に旅を続けます。神のよって祝福された人生は、神と共に歩む旅路であります。聖家族の旅路は、神のことばと共に垂歩む巡礼の旅路でありました。

教皇さまは12月24日に聖年の扉を開かれ、聖年を開始されました。世界中の各教区の司教座聖堂では、聖家族の主日にミサを捧げ、聖年の開始を告げるようにと求められています。25年に一度の聖なる年が始まります。

この聖年のテーマは、「希望の巡礼者」とされていますが、そこには、希望というテーマと旅を歩むというテーマの二つ、現代社会に生きる教会にとって重要な二つのポイントが示されています。

教皇さまは聖年の開始を告げる大勅書「希望は欺かない」の冒頭に、「すべての人は希望を抱きます。明日は何が起こるか分からないとはいえ、希望は良いものへの願望と期待として、ひとり一人の心の中に宿っています (1)」と記し、この世界を旅し続けるわたしたちの心には、常に希望が宿っていることを指摘されます。同時に教皇さまは、「希望の最初のしるしは、世界の平和と言いうるものです。世界はいままた、戦争という惨劇に沈んでいます。過去の惨事を忘れがちな人類は、おびただしい人々が暴力の蛮行によって虐げられるさまを目の当たりにする、新たな、そして困難な試練にさらされています (8)」と指摘され、この数年間の世界の現実が、いかにその希望を奪い去り、絶望を生み出すものであるのかを強調されています。いま世界は希望を必要としています。教会は絶望ではなくて、希望を生み出す源となることが求められています。

教皇さまは、「聖年が、すべての人にとって、希望を取り戻す機会となりますように。神のことばが、その根拠を見つけるのを助けてくれます (1)」と、人となれらわたしたちのうちに住まわれた神のみことばに耳を傾け、希望を見いだすよすがとするように勧めておられます。教会は希望を生み出しているでしょうか。暴力や排除や差別によって、教会が絶望を生み出すものとなっていないでしょうか。希望を生み出す旅路を、この一年続けて参りましょう。